

## 朝鮮の印刷文化

富山大学人文学部教授 藤本幸夫

朝鮮は印刷文化が栄え、特に活字印刷が早くから始まって盛行する等、世界印刷文化史上に於いても輝かしい歴史を有する。朝鮮印刷文化についての紹介はあまり類を見ず、紙幅を与えられたのを機に、簡単に述べてみたい。

### 一．統一新羅時代(677 - 935)

朝鮮は中国文化を積極的に受容し、それを咀嚼、発展せしめて、東アジアに於いては中国に次ぐ文化国家であった。印刷文化も同様である。印刷文化は文化を構成する一要素に過ぎないとも言い得るが、その比重は甚だ大きい。

さて、本格的木版印刷は、中国で隋あるいは唐初に興ったとされる。その発祥地中国で刊年の確実な最古の木版印刷物は、『金剛般若波羅蜜經』一巻(868)である。従来世界最古の木版印刷物は、日本の『百万塔陀羅尼』(770)とされたが、1966年10月新羅の古都慶州仏国寺の石塔より、木版本『無垢浄光大陀羅尼經』一巻が発見された。同經の印刷は、唐での同經の漢訳(704)以降同寺創建(751)の間にあり、現存世界最古の木版印刷物と推定されている。統一新羅のものとしては、他に写經四巻が伝わるのみである。

### 二．高麗時代(918 - 1392)

高麗時代は以前同様仏教を尊崇したが、政治理念としては儒教に依拠した。958年には科擧が実施され、仏書のみならず多数の漢籍類も翻刻された。高麗で特に有名なのは大藏經であろう。遼の侵襲を蒙り、その退散を祈願した初雕大藏經(1011 - 87)、大覚国師義天が經典の注釈を集大成した統藏經(1092? - 1101)、蒙古の侵略で初雕大藏經が烏有に帰し、再びその退散を祈念した再雕大藏經(1236 - 51)がある。

再雕本は韓国海印寺に板木を伝えるが、両面に刻字した板木が八万数千枚に及ぶので、俗に「八万大藏經」と称される。高麗時代は大藏經以外に諸寺刹で仏書を出版し、又官やその他で外典(仏書以外)を多数出版している筈であるが、現存は誠に寥々たるものである。

ところで高麗時代に鑄字(金属活字)印刷の行われたことは周知の事実であるが、近年その実態が具体的に明らかになりつつある。活字印刷の濫觴は宋にあり、十一世紀前半に畢昇が膠泥活字(粘土活字?)を作り、鉄版に植字して印刷した。その後元代にかけても膠泥・鉛・木活字が行われているが、中国ではさほど盛行しなかった。

高麗では文献上『詳定礼文』五十巻が、1234 - 41年の間に鑄字で二十八部印刷されたことが判る。又鑄字本を1239年に覆刻した『南明泉和尚頌証道歌』一巻があり、その底本たる鑄字本は十三世紀初頭頃にあると思われる。1972年にフランス国立図書館所蔵の、1377年韓国清州牧外興徳寺刊『白雲和尚抄録仏祖直指心体要節』巻下(闕巻上)一冊が公開され、一躍脚光を浴びたが、これが現存世界最古の鑄字本である。活字の材質は明らかでない。又同書と同一の鑄字本の覆刻書『慈悲道場懺法集解』二巻も発見されている。

### 三．朝鮮時代(1392 - 1910)

朝鮮時代は約500年続いたが、仏教は尊尚せず、朱子学を治国理念とした。従って仏書は主として寺刹で刊行された。中央政府(ソウル)の官版では、鑄字(銅が中心、他に鉄や鉛)印刷が大部分を占め、刊行部数の多い場合は木版によった。地方の官版は木版が中心で、木活字も用いた。民間も木版が中心で、十八・十九世紀には木活字使用も多かった。

中央の官版で鑄字印刷が中心となるのは、刊行部数が百部前後と少ないためである。百部のうち八十部ほどは、「何時・誰に・何書」を与えるという記録（内賜記）を第一冊前表紙裏に墨書して、臣下に下賜された。これを内賜本と言う。内賜本は主として高官に、医学・天文・数学書のような実用書は、卑官の実務家にも与えられたが、臣下にとってはこの上なき名誉であった。全国的に広布すべき書籍は、地方諸官衙に鑄字本を送付し、それをそのまま覆刻せしめた。中央で校正を厳密にしておけば、全国的に同質のテキストが得られるからである。

鑄字は経済的・技術的問題のために、民間では殆ど作られなかった。官版における鑄字の種類は、三十種以上に上る。朝鮮時代の最初の鑄字は癸未字(1403)で、以降庚子字(1420)・甲寅字(1434)・庚午字(1450)・乙亥字(1455)・甲辰字(1484)・癸丑字(1493)等々があり、多くは鑄造年の干支で呼称される。

朝鮮本は仏書以外は刊記を欠くことが多い。例えあっても干支で記されることが多いため、刊年の特定は困難で、版式や紙質等で推定することになる。鑄字本の場合は鑄字の使用期間が限定されているため、刊年推定はほぼ可能である。木版本の場合は、その板木を刻した刻手の名が版心（板木の中央部）に彫られることがあり、それを手掛かりに刊年・刊地の特定や推定も可能である。

朝鮮の書肆については詳かでない。十六世紀前半に官立書肆設置の建議がなされたが、その結果は明らかでなく、又十九世紀前半には官立書肆が設けられたが、十分に機能を発揮せぬままに廃止された。民間での営利的書肆は、一般的に十八世紀後半以降とされるが、さほど活発ではなかった。書肆未発達最大の要因は、購読者層の寡少にある。全人口中数パーセントの両班（支配層である知識人）や中人（医学・天文・数学等の実務担当者層）が購入層であり、その人々は書籍の入手困難を託っているが、

さりとて彼等を対象に書肆が成立するには少なすぎた。又民間に本格的書肆を立ち上げるに十分な、資本の乏しかったこともある。

結局書籍入手の方法としては、(1)王よりの下賜（内賜本）、(2)板木所在地に紙を送っての印刷依頼、(3)書籍売買斡旋者（例えば下級役人）を通じての購入又は交換、(4)友人間の重複本交換や授受、(5)地方高官である友人よりの地方刊行書の寄贈、(6)中国へ赴く使臣等への中国本購入依頼、(7)自ら或いは他人に依頼しての写本作製、等がある。

これら諸手段の中、最も基本的なものは(2)である。そのためには必要な冊板（板木）の所在地を知ることが肝要であった。両班たちの日常常識書である『攷事撮要』二巻（1554）は、初版以来幾度も改版を重ねて重用されているが、同書中に地方官衙所蔵の冊板が記録されている。又地方ごとに『冊板目録』も編纂され、これらによって冊板所在地を知り得た。これら『冊板目録』は今日に於いては、往時の出版状況を知り得る貴重な資料になっている。

#### 四．日本の朝鮮本受容

日本は古来多くの朝鮮本を受容して来た。538（或いは552）年百濟よりの仏教伝来が、それをさらに促進したに相違ない。仏書等伝来の記録はあるが、鎌倉末以前の齋来書そのものは確認されていない。室町時代には三種の大蔵経が幾度も将来されたが、その一部のみが伝存する。豊臣秀吉の朝鮮侵略（1592・1597）は朝鮮に深甚なる惨禍を齎したが、その際に多量の朝鮮本が掠取将来された。これらは現在東京を中心に各地に散在するが、十六世紀刊本が主で、十五世紀やそれ以前の刊本は少ない。それらの多くは韓国にも伝存するが、殆どは残本である。日本では殆どが完本で保たれ、極めて重要である。江戸時代には対島の宗藩が日朝交渉に与ったが、1683年の同藩「蔵書目録」には、約3200冊の朝鮮本が確認される。また明治から昭和前

期には日本の古書店や学者・好書家等が、多量の朝鮮本を購入し、現在各地に伝存する。

これら朝鮮本は日本で屢々翻刻されたが、特に江戸時代には秀吉時将来本によって多くが翻刻され、日本の学術に及ぼした影響は極めて大きい。又中国で既に失われた書籍で、朝鮮刊本という形で現存するものも少なくない、朝鮮本の研究は、朝鮮学は言うに及ばず、日本学や中国学に資する所甚大である。

#### 五．朝鮮本総合目録の作製

以上の如き経緯で日本には貴重な朝鮮本が多量に現存するが、それらの刊種・刊者・刊年・刊地等は多くの場合未詳で、所蔵所さえ明らかでないものも多い。筆者はこれら朝鮮本を三十年間に亘り調査して来た。現在8 - 9割を看了して、総合目録の作製に着手している。調査項目は28項目に及び、従来になく詳細である。書誌学的観点からの著録で、刊種の特定、刊・印・修の区別、刊者・刊年・刊地の特定や推定、蔵書印、撰者の経歴、出版の経緯等に及ぶ。研究者がある書を求めて諸処を巡らず、直ちに最良のテキストに到れるように配慮している。

#### 六．終わりに

筆者は元来語学の徒で、現在富山大学人文学部で朝鮮語学を担当している。韓国留学より帰国した1970年、日本現存朝鮮語学書発掘の目的で作業を始めたが、その範囲は次第に全分野に広がった。対象資料の9割以上は漢文から成る。調査開始時、筆者は文学部言語学科博士課程の学生であったため十分な旅費もなく、専ら文学部及び本図書館所蔵書を対象とした。

本館に就いて言えば、河合弘民博士旧蔵の河合文庫があり、同文庫全体が貴重書に指定されている。河合文庫は大きく朝鮮本と十九世紀後半の商店文書等から成る。前者には貴重書は少なく、殆どは十八・十九世紀の普通書であるが、後者は朝鮮朝末期の商業の実態を示す貴重な資

料である。

当時は以前の旧図書館で、河合文庫は別棟にあった。現在の博物館あたりにレンガ造り二階建て書庫が、東山通りに平行して一列に長く三棟連なり、その一番奥の二階に別置されていた。工事現場用の手押し一輪車に書籍を載せ、鍵を預かってよく往復したものである。本館書庫内で発見したのは、『歴代兵要』十三巻（闕巻三）存十二冊で、庚午字（1450年鑄造）で印刷されている。この活字は謀反の罪で死を賜った王子、安平大君の揮毫に基いて鑄造され、印刷書としては『古今歴代十八史略』十巻、『古文真宝大全』残本が確認されるのみで、同書が第三種目となった。近年更に『算学啓蒙』三巻が発見された。庚午字は1450 - 55年間使用されたので、上記書はすべてその間の印刷書である。又地下階段の下部空間に、拓本集『金石集帖』216冊が幾山かに積み重ねられていた。コンクリートに接する最下冊は湿気を吸って破損しており、館員の森島さんと箕子板を敷いたのも、懐かしい思い出である。これは十八世紀後半に蒐集された拓本の一大集成で、今日既に失われた碑石も多く、又現存しても風雨で摩滅を蒙り、誠に貴重である。

筆者の朝鮮本調査の原点は本館にあり、多くの館員の方々から御配慮をいただいた。筆者にとって本館は母の懐のような存在である。往年の建物は既になく、又館員諸氏も殆どが去られ、今も時に調査に訪うこともあるが、往時を偲んで転た感慨に堪えないものがある。

近年図書館の地位は、いずれの大学に於いても、全学諸機関中で甚だ低いと聞くが、筆者は図書館こそ大学の中心的存在であると、常々思っている。全国図書館館員諸氏の矜持と奮発を祈って止まないところである。

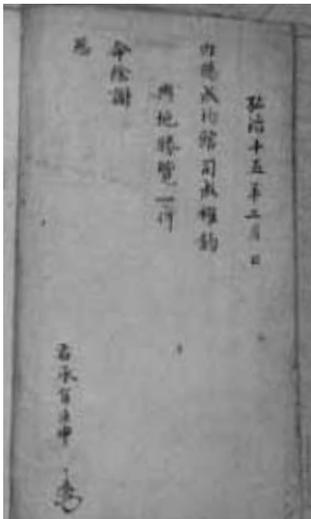
（ふじもと ゆきお）



『真西山読書記乙集』大学衍義』卷三十七卷首。  
1434年甲寅字印本。  
全四十三卷中、卷二十三至四十三の十冊を所蔵するが、日本各地に僚巻がある。



『歴代兵要』第一冊首。  
1450 - 55年間庚午字印本。全十三巻中、巻三のみを闕く。庚午字印本は四種知られ、該書は天下の孤本。



『東国輿地勝覧』第一冊前表紙裏の内賜記。弘治十五年（1493）二月権鈞への内賜本。一般に内賜記の年を刊年と見做す。



『東国輿地勝覧』巻一巻首。  
1493年癸丑字印本。巻一・二の一冊を存するのみであるが、この活字による印本は少ない。



『金石集帖』第一冊前表紙。216冊存するが、内容によって分類されている。



拓本集成『金石集帖』第一冊冊首。十八世紀後半の作製と考えられる。僚巻が韓国に若干存する。一組或いはせいぜい二組の作製であるうが、他所に確認できず、本館蔵書の持つ意義は大きい。